第12部会

東アジアの常識から見れば非常に特異で独自の日本の宗廟観が、儒学が思想の中心を成す近世にどう変容するのか、またしないのか、を検討するのが報告の課題である。

近世日本の宗廟観で、最も一般的なのは南北朝期には定着したとされる天子の宗廟に対する二所宗廟観である。その立場をとる論者の多くは、宗廟は天皇以下日本の万民が敬うべき日本の総鎮守と見なしている。この見解は、中世から存在した「万民神胤観」(高橋前掲書)の系譜上にある。また、宗廟の神の分霊が勧請可能という見解をとる論者もある。伊勢を「第一の宗廟」として、八幡宮との間に差を認めるものも多い。宗廟を二所に限らない見解もあるが、いずれも皇祖神や天皇霊を祀る神社を挙げる点で二所宗廟観の延長上にある。神武天皇や天智天皇を宗廟祭祀に加えるべきだとする主張もあり、陵墓を宗廟に擬する觀念の残存が認められる。以上のように、近世においても皇祖神・天皇霊を祭神とする神社、あるいは陵墓が宗廟と認識される事態は変わらなかった。

一方、近世の諸侯の中には儒学に傾倒し、宗廟を構える者があった。岡山藩主池田光政は、明暦元年(一六五五)祖先祭祀を仏式から儒祭に改め、万治二年(一六五九)に城内本丸西に祖廟を設け遷座した(「国史提要」岡山大学附属図書館蔵池田家文庫)。天子の宗廟ではなく諸侯の家廟であるとはいえ、かかる幕藩領主層の御霊屋としての宗廟の設置は、近世における本来的な宗廟の在り方の受容であり、従来からすれば新形態であった。

肥前国を題材に在地社会における宗廟認識に目を転じれば、

佐賀城下の白山八幡宮の由緒書の中に同宮は「佐嘉之宗廟」であるとの記述がある。天子の宗廟の神は各地への勧請が可能とする見解に則れば、これは佐賀に所在する宗廟八幡宮の意に解することもできる。しかし、皇祖神・天皇霊を祭神としない神社でも宗廟と称されている例や、「宗廟乃氏神」「鎮守宗廟」という記述も認められる。宗廟の語は地域の守護神の意味で使用されているのである。佐賀藩の「郷村帳」に見られる郡・郷の「崇廟」もかかる宗廟の用例からの派生であろう。かかる宗廟の用例は筑前・筑後・日向でも確認でき、筑後では寛永九年(一六三二)の例が知られる。肥前では、宗廟の語を同族の守護神に用いる例もある。

なお、本報告は科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号二一五二〇〇九一 研究代表者 井上智勝)の成果の一部である。

近代神社祭式の成立

—— 開放された神社の儀礼 ——

竹内 雅之

本発表では、近代、神社祭式が法制化された経緯を、「神社保存」の観点から論ずる。

神社の儀礼はどれくらいの歴史があるのだろうか。この疑問に答えるのは難しい。では、最も一般的な儀礼である拝礼作法に注目してみよう。

昭和二十三年、宗教法人神社本庁は規定第一〇号において、玉串奉奠にあたり「二礼二拍手一礼」の拝礼作法を定めた。それ以前、管制下においては、「二礼二拍手」であり最後の「一礼」はない。この事実を知った人のなかには、神社の儀礼は意外と歴史が浅い、と早合点する人もいるかもしれない。確かに、それも一面では真実であるが、また、別の面からは、歴史が長いともいえる。

『魏志倭人伝』には、蹲ること、跪くことが敬礼作法とされている。これは、神社作法の「拝」に通じる。いうまでもないが、相手より頭を下げることが、共通している。神社祭式の専門家は、これを「経の礼」という。さらに、『日本書紀』には天皇即位の際、群臣が「拝」あるいは「拍手」をした記録がある。「拍手」はいわゆる「緯の礼」で、「経の礼」と対をなす概念である。拝礼作法の要素としての「拝」「拍手」は奈良時代には、すでに、貴人に対する礼法とされていた。しかし、これらは、神社に限った敬礼作法とは言えない。もしも、「経の礼」「緯の礼」が組合された作法が神社特有のものだとすれば、延暦の『皇大神宮儀式帳』が初見となる。そこには「四拝二拍手一拝」を二遍繰返す作法が示されている。そして、現在に至るまで、「拝」「拍手」の回数こそ変化するが、これらの組合せであることに変わりはない。経糸と緯糸をいかに織るかは時代時代により異なる。

それでは、近代、神社祭式はどのような経緯で決められたのであろうか。昭和十七年の改定神社祭式行事作法定制の際、神祇院の囑託として、調査、審議にあたった長谷外余男は、「諸

流混淆時代」の明治三十二年、京都のある大社で、乱階して立ちながら開扉する宮司を目撃した。長谷は「恐ろしく変った作法」ではあるが「抛るべき制規が無いのだから、間違つてゐるとは言ひきれない」と感想を述べている（『改正神社祭式行事作法講話』）。

右に掲げた逸話の時代、「抛るべき制規」とは明治八年制定の式部寮達「神社祭式」である。しかしながら、寮達「神社祭式」には神職の起居進退までは規定されていない。詳細な規定がないことは、失われつつある神社の儀礼が、ここから更に、先細りするかも知れないと、問題意識のある神職は危機感を抱いたのであろう。

明治二十四年、京都府神官取締局理事の半井真澄は「神社保存」に関する演説のなかで、神職の自治組織の必要性を説くとともに、神官取締規程を紹介している。それによると、「祭祀ヲ鄭重」に行うのは「祠官掌第一ノ責任」であり、宝物、什器、記録を保護するよう求めている。さらに、「祭式禮典ハ、皇道ノ大儀ナレハ、神典古史ニ則リ、舊格古式ニ據リ、作法ヲ講究練磨スヘシ」と続けられる。半井は、明治三十二年、当時の京都神社界の識者の協力を得て、詳細な神社故事書『神職寶鑑』を編輯した。

また、明治三十三年、皇典講究所には、礼典調査会が設けられ、神社祭式を一定にすることが、規則の第一に掲げられた。礼典調査は、内務省の依頼を受け明治三十八年まで続けられ、その成果は、明治四十年の内務省告示「神社祭式行事作法」に結実した。しかしながら、礼典調査の目的は、祭式一定のみな

第12部会

らず、神社の音楽、神饌、神符、神像、旧儀を調査することになった。調査の目的は「神社保存」にあったといつてよい。以上、近代において、神社祭式が法制化、すなわち、神社の儀礼が開放された背景には、「神社保存」の意識があったことを指摘した。

内務省神社局と神社調査

遠藤 潤

神社行政を担当する国家機関である内務省神社局（一九〇〇—一九四〇年）およびその発展的組織である神祇院（一九四〇—一九四五年）では、さまざまな形態での神社調査が行なわれていた。個別的かつ日常的な神社調査の例としては、神社から昇格願が出された際の神社調査や社殿の修理や境内の整備のための調査などが件数も多くよく知られている。これに対して機会に応じて網羅的的神社調査も行なっていた。近代初頭については、神社局以前の調査ではあるが、一八七六年に内務省蔵版の原本が完成した『特選神名牒』をあげることができる。神社局時代では、配布資料に掲載しているように、基本財産をはじめ官国幣社などの行政上必要な情報などを中心に、いくつかの網羅的な神社調査が行なわれている。なかでも、大規模な調査としてあげられるのが「特殊神事」についての調査である。ここでは、この「特殊神事」について、まず「特殊神事」調査の具

体的展開の概略を追い、つづいてすでになされた「特殊神事」の諸定義について見たうえで、「特殊神事」なるものの再検討を行なう。

内務省による「特殊神事」についての調査は、大きく三次に分けてとらえられる。まず一九一〇年代後半に官国幣社を対象に行なった調査、次に大正一三年（一九二四）度に行なわれた最も大規模な調査、そしてその後、昭和期に行なわれた調査である。調査は基本的に神社側から提出された資料を基礎としていた。調査結果は、まず大正一三年度の調査の進展と併行して『神社協会雑誌』に連載され、その後、官国幣社全体にわたる調査結果が内務省の内部資料として保管されていたが、一九四一年に神祇院が設立されると、そこから出版された。一連の調査の対象であった「特殊神事」であるが、この定義は必ずしも明確なものではない。これまでの定義の共通点をふまえるならば、国家によって定められた神社祭祀に対し、それに規定されていない形態の神事を指している。ただ、この「特殊神事」という概念は実体的あるいは客観的な概念としてとらえると、その指示内容が曖昧になるといふ性質を帯びている。ここで必要なのはこの用語が浮上してくるその社会的文脈、とりわけ「特殊神事」という対象が構成されるときに政策的関心を視野に含めることである。こうした関心について、大正一三年度の調査時に神社局長であった佐上信一の回顧にその一端が現れている。佐上は回顧のなかで、民衆が神社から離れていくという現状認識が特殊神事の調査の背景にあったことを述べている。このような認識あるいは問題意識が日本社会のなかで広く認知さ